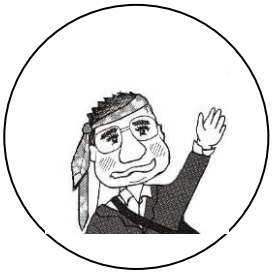
インド大魔王のエッセイ　　２０２４年８月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

宇多田ヒカルの「私」③

わが輩が述べた「梵我一如」について、「解ったようで分からなかった。まぁ、いいか・・・」などのあきらめ感想を頂いた。わが輩が「どこが解らなかったのですか？」と問えば、「なんとなく」というご返事を頂いた。これは偏に大魔王の筆力のなさ、理解の浅さの証明である。解るように説明できないのは、わが輩自身がよく理解していないからである。責任はわが輩にある。
そこで、われら探究巡礼団 2024 が今回訪れた南インドのアシュラム（宗教的施設）の聖者が語った見解を参考にしてみよう。

我はそれなり（梵我一如）、または、私はブラフマン（総体宇宙、宇宙的原理）であるは、私＝ブラフマンということを意味しているのではない。
単に「ブラフマンは『私』として在る」を意味している、と聖者はいう。つまり、ブラフマンは「私は在る」（ＩAM）として、生きているすべての中に存在している、というわけである。それゆえ、すべては、まず「自己の存在を認める」ことからはじまる。

この言説だけ読めば、ブラフマンという原理が「私」として現れているだけのことで、私＝ブラフマンと主張しているのではない、ということが理解できる。それならば、ブラフマン以外のものがあるのか？　たとえば、われわれの身体はブラフマンとは別ものか？　「すべての中に存在している」ということは、すべての身体の中に浸透しているということか？
ブラフマンはすべて（総体）なので、それなら身体もブラフマンにちがいない。そうするとブラフマンがブラフマンに浸透するということになる。はてな？　これはどういう意味か？
身体という「物」は変化する「モノ」、または幻のような「モノ」で、ブラフマンだけが普遍的な実在として「在る」ということを意味しているのか？（だから「物」なんて、どうでもよいのか？）
どうもインド哲学は「物」の扱いがぞんざいだと思えてならない。

なんだかワケの分からないことになってきた。ギモンだらけだ。
さてさて、ブラフマンの正体とは何なの？と、さらなる疑問をもたれた読者のために、わが旧友マヘーシャーナンダ師（Kaivalyadhama）の説を付記しておこう。
「ブラフマンといっても理解されない。それをエネルギーだと考えれば理解し易いよ」
この場合も、エネルギー＝ブラフマンだと断定しているわけではない。

以下は、わが輩の解釈であるが、エネルギーはすべての中に存在している作用（ハタラキ）である。われわれ人間が動き飛行機が飛ぶのもエネルギーのお蔭である。ソファー・ベッドに寝っ転がって、離れたところにあるテレビを操作できるのも、赤外線という目に見えないエネルギーのお蔭である。これら動的作用のエネルギーは、「物」を通して感じ、知ることができる。科学化学の対象となり得る。

ところが、静的作用のエネルギーは「物」を通しても知ることは難しい。科学・物理学・数学理論か、はたまた哲学によって知ることができる。

われらは動的作用なら何となく感知できるが、静的作用を容易に感知することはできない。部屋の電灯スイッチをオンにすれば、電流が流れたことを知ることができる。（動的作用）

ところが目の前にいるわが輩の脳から身体に流れる周波数は、読者諸氏には分からないだろう。（静的作用）

このようにエネルギーに例えれば、なんとなくわれらでも理解できそうだ。

これら動と静の作用をひっくるめたものがブラフマン、宇宙的原理といえる。原理（根本の法則）というからには科学的理論でいつか解明できるかもしれない。

この宇宙的原理の背後に、それを「コントロール」支配するものを想定すると「神学」になってしまう。これは、もう大魔王の枠外のことで、それ以上興味ある方は真面目な教会の先生に聞いていただきたい。まちがっても、今日世間を騒がせている「なんとか教会」の扉を開かないで欲しい。人間が恣意的に作った〝統一原理〟など、所詮人間の浅はかなチエによるものだからである。

エネルギーが現れる一つの「場」が、われわれ人間という「場」である。そのわれわれが、どのようにエネルギーを知り感じることができるのか。われわれの身体を通して、いや、「意識」を通して知ることができる。むしろ「意識」があるからこそ知ることができる、といえる。

だれだって、「わたしはいない！」と言うことはできない。「いない！」と言っている「わたし」はすでに意識として「在る」からである。

さて、南インドの聖者がいう、その「在る」ものとは心理学でいう意識ではない。美味しいものがあるとついつい手をのばしてしまう食欲的意識でもなく、美麗なものに目が奪われてしまう本能的意識でもない。意識の元のもとの意識、連続する意識、個体を超越した意識、「純粋意識」のことである。

われら凡人がこの「純粋意識」を直截的に「宇宙」と結びつけてはいけない。われらが思い浮かべる「宇宙」は、所詮われらが創り上げた思い違いの「想念」の一つにすぎないからである。

わが輩が宇多田ヒカルとお友だちなら（あり得ないが一）、「量子力学でみる宇宙世界は想念なのだよ」と伝えてあげたい。意識、純粋意識が、たった今「私」に現れた、この時こそが最高だ！とおもえる歌を歌ってほしい。

よけいなことだが、母君藤圭子の歌は心に響いたが、ヒカルちゃんの歌はおじさんにはよく聞き取れないし意味不明だよ。（難聴かな？）